

令和 6 年 6 月 6 日現在

機関番号：34314

研究種目：基盤研究(B)（一般）

研究期間：2020～2023

課題番号：20H01401

研究課題名（和文）現代インド被差別民の自己尊厳獲得にみる異種協働が生む社会倫理の宗教人類学的研究

研究課題名（英文）Heterogeneous Collaboration to Acquire Self-Dignity by a Group Suffering Discrimination in Contemporary India: An Anthropological Study on Religion and Social Ethics

研究代表者

根本 達（NEMOTO, Tatsushi）

佛教大学・社会学部・准教授

研究者番号：40575734

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 13,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は「マイノリティとの異種協働」を選択する現実に目を向け、この潜在的な価値を表現し研究者による社会的コミットメントを果たすことを目指した。より具体的には20世紀以降の不可触民解放運動を生前のアンベードカル時代（1956年以前）と、彼の死後のポスト・アンベードカル時代（1957年以降）に区分し、特に後者の差別構造と反差別実践を考察した。インドのナーグプルと近隣農村における現地調査と文献調査を実施し、1960年代以降の不可触民解放運動史料のデジタルアーカイブ化にも取り組んだ。これにより現在の攻撃的で男性優先主義的な運動ではまだ明確には具体化していない萌芽的な社会倫理を掘り起こすことを試みた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

2020年4月から2024年3月までに6回の研究会を開催し、異カースト間結婚とダリト運動の関係性、佐々井秀嶺の思想実践形成、「深い人間平等」という非差別の原理、仏教改宗と「知的亡命」について学術的検討を深めた。これを踏まえ、「虚空を造形する佐々井秀嶺の宗教表現の分析」（根本達、『文化人類学』86巻3号、2021年）などの論文を発表した。また1960年代以降の不可触民解放運動史料のデジタル化の作業を12回行った。2023年6月には佛教大学で対話会「若者たちへ 佐々井秀嶺師との対話」を開催し、研究成果の報告を実施した。これ以降、佐々井秀嶺保存史料のデジタルアーカイブを一般に公開している。

研究成果の概要（英文）：This study confronts the reality of choosing to “work heterogeneously in collaboration with minorities” and aims to express this potential value and fulfill the social commitment of the researchers. In particular, the researchers divided the Dalit movement since the 20th century into the Ambedkar era during Dr. Ambedkar’s lifetime (before 1956) and the post-Ambedkar era which is after his death (1957 onward), and discussed the latter’s discriminatory structure and anti-discrimination practices. Field and literature research were conducted in Nagpur and nearby rural villages in India, and efforts were made with the digital archiving of the historical documents of the Dalit movement from the 1960s onwards. Six workshops were held from April 2020 to March 2024 to gain deeper academic insight on the Dalit movement. This was how the researchers attempted to unearth a budding social ethic that has not been clearly embodied in the current aggressive, male-centric movement yet.

研究分野：文化人類学

キーワード：宗教人類学 南アジア地域研究 アンベードカル 佐々井秀嶺 デジタルアーカイブ マイノリティ
ダリト運動 インド仏教徒

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

新自由主義の圧倒的な影響の下、不確実な管理社会を生きる人々の間ではマジョリティへの同一化を望む者が増加し、マイノリティへの排他的な暴力性が世界各地で同時代的に顕在化している。この困難の中で同時に生まれつつあるのは、「マイノリティとの異種協働（同盟）」を選択する現実であり、本研究は、このいまだ潜在的で萌芽的な価値を表現し、研究者による社会的コミットメント（問題への参与）を果たすことを目指す。この現代社会における基本的問いを、本研究は南アジアの被差別民として代表的なダリト（元不可触民）を対象として議論する。より具体的には20世紀以降の不可触民解放運動を生前のアンベードカル時代（1920年代～1956年）と、彼の死後のポスト・アンベードカル時代（1957年～現在）に区分し、「市民的・法的な（目標としての）平等」と「根源的な（存在としての）平等」という「二つの次元の平等性」を分析視点とする。この「根源的な平等」とは、それぞれの差異を尊厳として肯定し、そこにある矛盾を奥行きとして引き受けることを意味する。特にポスト・アンベードカルの差別構造と反差別実践を考察し、現在の攻撃的で男性中心的な運動ではまだ明確には具体化していない「潜在性」もしくは萌芽的な社会倫理を掘り起こし、現在のダリト運動の再評価に繋げたい。以上の研究を実施するため、現代インドのナグプルと近隣農村における人類学的現地調査に加え、1960年代から現代に至る不可触民解放運動の歴史資料のデジタルアーカイブ化とその分析に取り組む。これは今後の研究にとって重要な基礎資料の整理にもなる。現在もダリト運動の中心地であるナグプルには他と比較できない数の現地活動家の記録などが蓄積されてきた。特に僧侶の佐々井秀嶺は1960年代中旬から現在に至る半世紀以上、自らの仏教思想を記した手記や日記に加え、不可触民解放運動に関わる映像記録や写真、現地語の雑誌や新聞の切り抜きなどをインド現地に保存してきた。

(1) 根本達

「不可触民」カースト出身のアンベードカルは『カーストの絶滅』（1936）の中で「いかにカーストを破棄するか」という問いを立て、「異カースト間の結婚が最善の策である」と論じた。実際に彼は1948年にバラモンのドクターのサヴィターと再婚し、異カースト間の乖離を埋めようとした。しかし現在でも大きな暴力的反応を引き起こすのはダリト男性と上位カースト女性の結婚とされる。現地のダリトの間でもアンベードカルとサヴィターの結婚はほとんど言及されず、南アジア研究の専門家が論じたこともほぼない。

(2) 鈴木晋介

佐々井秀嶺の日本出国（1965年）以降の日記・手記、書簡、写真等の集成である「佐々井秀嶺史料」は、これまで明らかにされてこなかった佐々井の思想実践形成の過程及び思想的影響関係を解明する上で貴重な史料群である。しかしその膨大な量と保存状態の問題からほぼ手つかずの状態にあり、ひいては史料に基づく佐々井秀嶺研究も未踏の領域に留まる研究状況にあった。

(3) 関根康正

社会的差別の下で被差別民はいかにしたら全人的人間として生きられるのか。ガンディー的な認識倫理の「改革」ではなく、アンベードカル的な支配構造転換の実践倫理という「革命」が求められる。アンベードカルが示したように、被差別ゆえに全人的な生の肯定に呻吟する人々は、その両価的な境界性を孕む自己人生を元手に「深い人間平等」に達する「革命」的实践において独自の自立空間を開拓するほかない。同志の草の根の実践事例の発掘が待たれる。

(4) 志賀浄邦

アンベードカルによって端緒が開かれ、佐々井秀嶺師によって推進されてきた仏教復興運動及び不可触民解放運動は、これまで種々の視点から研究されてきた。しかしながら、アンベードカルとその同胞たちの仏教への改宗の目的や意図・動機については研究者によって大きく二つの意見（改宗はどちらかというと政治的・社会的なものであったという意見と、改宗はより精神的なものでアンベードカルの宗教的・霊的探究の結果であるという意見）に分かれており、未だ明らかになっていない点が多かった。

2. 研究の目的

マイノリティへの暴力性が同時代的に顕在化する現在、これを乗り越えるために「マイノリティとの異種協働」を選択する現実も生まれつつある。本研究は南アジアの被差別民として代表的なダリト（元不可触民）を対象とする。「不可触民の父」B.R.アンベードカル（1891—1956）は不可触民出身でありならインド憲法起草委員長を務め、1950年施行のインド憲法に「カースト差別の禁止」と「不可触民制の廃止」を記した。1956年10月、アンベードカルはナグプルで数十万人の元不可触民とヒンドゥー教から仏教へ集団改宗したが、12月に死去する。本研究は

インド現地調査とデジタルアーカイブ化した佐々井秀嶺保存史料の分析をもとに、「市民的・法的な平等」と「根源的な平等」の区別を分析視点として、「不可触民の父」アンベードカルが死去した後のポスト・アンベードカル不可触民解放運動に「潜在」する社会倫理を掘り起こす。特にアンベードカル反差別実践に深く関わりながらも、評価が固定化された議論のみ行なわれてきた三つの歴史的な選択（①欧米留学における近代的価値観の獲得、②改宗先としての仏教の選定、③不可触民アンベードカルによるバラモン女性との再婚）に光を当て、この選択のポスト・アンベードカル現在における展開を人類学的なインド現地調査によって明らかにする。特にそれぞれの選択に対応するポスト・アンベードカル展開として、①管理社会の差別構造におけるダリトの反差別実践、②仏教僧佐々井秀嶺と仏教徒の宗教実践、③ダリト活動家と異カーストの女性の結婚を考察する。以上により、近傍を生きる自己と他者が自らを作り直す異種協働を通じて、差異を自己尊厳として肯定する社会倫理が生まれる点を明らかにし、不確実な管理社会の暴力性を乗り越える萌芽的価値を論じる。

(1) 根本達

ダリト活動家男性と他のカーストの女性との創発的な異種協働の一つとして現在のナーグプルにおける異カースト間結婚を検証する。家族の「名誉」を汚したとされるダリト男性と上位カーストのヒンドゥー女性の恋愛結婚は両者にどのような軌跡を描かせるのか。自己尊厳の獲得を重視するアンベードカルモデルと、自己と他者の関係性に活路を見出すガーンディーモデルの統合の議論を踏まえ、異カースト間結婚が「他者との関係性における自己尊厳への承認の獲得」へ向かう社会倫理を生み出す点を考察する。

(2) 鈴木晋介

第一に佐々井史料の保存と研究活用を目指した史料整理とデジタルアーカイブ作成に取り組む。デジタルアーカイブはウェブ上に構築し、広く一般に向けた情報公開を企図している。第二に史料読解に基づく佐々井の思想実践形成過程の実証的解明を行う。

(3) 関根康正

差別者と被差別者が、立場を異にしながらも共有する地平は死に怯える生の苦悩である。人間の生死は宇宙的他者との直面という不可避の境界の事態を抱えるから、そこが「深い人間平等」創設の底板になる。社会的「周辺」に置かれる被差別者こそがその「境界」により無防備に露出して生きている。その彼らの「境界」的状況を生き抜く実践には、いわゆる社会的平等よりも「深い人間平等」の原理が作動している。そのことを諸現実から証明する。

(4) 志賀浄邦

この研究の目的は、アンベードカルが改宗先として仏教を選んだ理由を再検討すること、その選択が持つ宗教的・社会的意味を探ること、また西洋近代の価値観や思想とアンベードカル仏教観との関係を明らかにすることであった。具体的には、①アンベードカルが改宗先として仏教を選択した理由の再検討、②古代仏教文献に見られる仏教への改宗に関する記述の収集とアンベードカル自身による説明との比較、③仏教への改宗の前提となる欧米留学における近代的価値観の獲得プロセスに関する考察を行った。

3. 研究の方法

(1) 根本達

インドのナーグプルと近隣農村でのフィールドワークとデジタルアーカイブ化した史料の分析を研究の手法とした。現地調査は合計3回（2023年3月、2023年8月、2024年2月）にわたり行った。それぞれの調査ではダリト（元不可触民）と異カーストとの恋愛結婚について参与観察を実施した。これに加えて現地に保管されている佐々井秀嶺保存史料のデジタル化作業に取り組んだ。また佐々井秀嶺へインタビューや佐々井の宗教実践について現地の人々へのインタビューも実施した。

(2) 鈴木晋介

アーカイブ作成は個々の史料のデジタル撮影を実施、文章群はデジタル入力による翻刻を行った。史料研究は佐々井のインド初年1967年からナーグプルに拠点を移すまでの1年間に執筆した18冊（約4,600頁）を中心に、B.R.アンベードカルの後継を自認していく70年代前半までを対象とし思想実践形成の過程を史料に沿って跡付ける方法を取った。

(3) 関根康正

現実1：アンベードカルがダリト解放のための仏教改宗運動の実践原理とした『ブッダとそのダンマ』は「深い人間平等」探究書として読む。現実2：ダリト解放運動家K・イライアの諸著作から清浄主義に対して生産主義を独自価値とするダリト的生き方を学ぶ。現実3：F・ファノンから「非植民地化」という実践概念を学ぶ。現実4：徳島の被差別民が担った門付け儀礼が地域

文化として再復活した運動過程に学ぶ。これらの諸現実を比較考察した。

(4) 志賀浄邦

文献調査とフィールド調査を主な研究方法とした。文献調査では、古代仏教文献とアンベードカル自身の言説を比較検討しつつ、アンベードカルの言説に見られる欧米の哲学者（ジョン・デューイ等）の影響を考察した。フィールド調査では、マハーラーシュトラ州のナグプルとブネーを訪れ、アンベードカルまたは仏教に関わりのある場所や施設の調査や、佐々井秀嶺をはじめとする現地の仏教関係者へのインタビューを行うとともに、今後の研究の発展と深化のため、インド仏教徒やインド仏教の研究者とのネットワーク構築にも注力した。

4. 研究成果

(1) 根本達

2020年4月から2024年3月までの期間に計6回の研究会を開催し、デジタルアーカイブの成果を踏まえつつ、ダリト運動と異カースト間結婚の関係性を中心に学術的検討を深めた※。デジタルアーカイブ化については同じ期間に日本国内で合計12回の作業に取り組んだ。この期間にデジタル化した手記は計4300枚程度、写真は計5100枚程度である。これらの国内での作業に加えて、2023年3月にはインドのナグプルで6800枚程度の撮影を行い、デジタル化した。映像資料については2020年度にVHSテープ167本（1本平均2時間）とHDVテープ50本（1本平均2時間）のテープメディアのデータ変換作業を行った。本プロジェクトの研究成果として学術論文「虚空を造形する佐々井秀嶺の宗教表現の分析—岩田慶治の新アニミズム、C. S. パースの記号論、佐藤信夫のレトリック論を視座として」（根本達、『文化人類学』86巻3号、384-403頁、日本文化人類学会、2021年12月）を発表した。また一般向けの報告書として「佐々井秀嶺保存史料のデジタルアーカイブ化プロジェクト—5年間（2016年11月から2021年12月まで）の取り組みについて」（根本達、『龍族』22号、4-5頁、南天会、2022年1月）を執筆した。

(2) 鈴木晋介

研究期間を通じて日記ノート72冊分（約1万8千頁）を中心にデジタル撮影画像の時系列に沿った整理・分類を行い史料に基づく佐々井秀嶺研究の基盤を整えた。また、その思想をよく表現する手記30編を選出し翻刻とともにウェブ上の「佐々井秀嶺デジタルアーカイブ」にて一般公開した（2023年6月）。思想実践研究の成果は大きく2点に集約される。1点目は研究前提としての史料（日記）の性格理解に関わる。既刊一般書籍と日記との齟齬を手掛かりに、日記を構成する佐々井自身の2つの視角（通常の日記にみる「都度の」視角と特定時点において己の生の軌跡を包括的に「書き直す」俯瞰的視角）の違いの析出を試みた（口頭発表、2023年3月）。2点目はインド初年に止宿した日本山妙法寺の山主・藤井日達の思想実践からの影響の解明である（口頭発表、2024年3月）。このことは佐々井という人物のユニークな立ち位置（近代日本における広義の日蓮主義という思想運動の派生として、同時代インドのアンベードカル「不可触民」解放（＝仏教復興）運動と身をもって邂逅する）を明らかにするものであり、今後の佐々井秀嶺研究の中心的問題の所在を明示するものとなった。その他、研究成果の社会還元としてエッセイ執筆（2022年7月）と佐々井秀嶺対話会での成果発表（2023年6月）を行った。

(3) 関根康正

「不浄」というスティグマを背負い社会的「周辺」に置かれ、「普通に社会的な仮構に寄り添って自己肯定して生きる」ことを阻まれ、外部に剥き出しで晒される不安定な生を余儀なくされるのがダリトなどの被差別民である。被差別民は生死の真実を告げる宇宙的他者との対面という過酷な「境界」経験の不安定を常に生きることを余儀なくされる。それゆえ、この彼らの「境界」的生き様には、社会的平等を掲げた「反差別」のお題目では追い付かない、切迫した傷つきやすいアイデンティティの危機の現実に対峙できる本格的な知恵としての「深い人間平等」という差別以前の「非差別」原理が自ずと蓄積されている。事実、彼らの日常現実の中で独自に開発された自立的「非差別」の獲得の様々な「革命」実践が認められる。そこには、被差別民を不浄視する条理的な清浄主義という支配言説を無効にする自立自尊生活のために生産主義に立脚し多様な資源・資本を必要に応じて協働・連携しあう平滑な「小さな社会空間」が創出されている。

(4) 志賀浄邦

前半2年間の研究の結果、アンベードカルとその同胞による仏教への改宗が、所属する宗教の単なる変更ではなく、差別され抑圧されてきた人々を解放し、その先に新たな共同体を形成することを目指す「知的亡命」としての側面があることが明らかになった。特にアンベードカルの仏教観はアメリカ・コロンビア大学においてデューイから学んだプラグマティズム思想に大きな影響を受けており、これが彼の思想と実践にある種の理論的基盤を提供していたことも判明した。さらに、アンベードカルの著作（特に『カーストの絶滅』）とデューイの著作（特に『民主主義と教育』）のテキストレベルの比較を通じて、アンベードカルの手法が古代インドにおけるテキスト注釈の方法に準拠している（または偶然一致している）ことも明らかになった。当研究課題

と特に関わりの深い研究成果として、「B. R. アンベードカルの改宗論：「知的亡命」としての仏教への改宗」（2021年）と「〈プラグマティズム〉という視座から見たインド仏教」（2023年）という論文を挙げておきたい。なお、2024年3月にはプネー市とナーグプル市を訪問し、インド仏教の現況（仏教行事・仏教研究等の最近の動向）についてフィールド調査を行う機会を得た。

2023年6月、京都市の佛教大学紫野キャンパスにおいて講話・対話会「若者たちへ 佐々井秀嶺師との対話」を開催した。佐々井秀嶺によるパーリ語の勤行と講話に加え、根本達、鈴木晋介による研究成果の報告、志賀浄邦による佐々井秀嶺との対話（研究者および参加者との質疑応答）を実施した。当日は300名を超える参加者があり、6社の新聞社から記者が取材に訪れた。佐々井秀嶺との対話のパートでは参加者から100以上の質問が出され、研究者を司会として佐々井と一般の参加者との質疑応答を行った。この対話会で佐々井秀嶺保存史料のデジタルアーカイブ (<https://sasaiarchives.com/>) を初めて公開した。これに加えて佛教大学の会場では佐々井秀嶺の手記や写真の展示、映像の公開なども行い、一般の参加者が佐々井秀嶺の思想と実践に触れる機会を設けた。また佐々井秀嶺の手記は読解が非常に困難なため、パソコンでの翻刻作業も実施してきた。これにより研究者だけでなく一般の人々にとっても佐々井秀嶺の手記が読解可能なものとなった。これらを公開するウェブサイトは佐々井秀嶺の年譜もしくはキーワードで手記、写真、動画を検索できるかたちで作成した。

※研究会の開催日と報告タイトルは以下の通り。

・2020年11月13日

- ① 関根康正：Who is witnessing the Subaltern?: Rethinking from the theories of “Anthropology of Pollution” and “Street Anthropology”
- ② 志賀浄邦：アンベードカルの改宗論：〈知的亡命〉としての仏教への改宗

・2021年3月17日

- ① 根本達：「血の融合」から「交換関係の作り直し」へ—現代インドにおける不可触民解放運動と異カースト間結婚
- ② 鈴木晋介：佐々井秀嶺研究の展望とデジタル資料の活用

・2022年2月17日

- ① 関根康正：「独立インド」をめぐるポストコロニアリズムについての一考察—非植民地化の「運動主体」としてのサバルタン/「ダリト」
- ② 鈴木晋介：「竜樹の夢告」と求道のアブダクション—佐々井秀嶺資料1967-1969年を中心に

・2022年8月20日

- ① 志賀浄邦：〈プラグマティズム〉という視座から見たインド仏教
- ② 根本達：現在のアンベードカライトは十分にアンベードカル的か？—現代インドのダリト運動において異カースト間結婚が持つ批評性について

・2023年3月20日

- ① 関根康正：差別意識の溶解の可能性をめぐってのいくつかの覚書
- ② 鈴木晋介：佐々井秀嶺史料の研究(3)—史料読解の前提について/王舎城道場時代(1967-1968)

・2024年3月20日～21日

- ① 鈴木晋介：佐々井秀嶺の研究(4)—インド滞在1年目の自己成型(1967-1968)
- ② 志賀浄邦：インド現地調査報告と現在の問題意識
- ③ 根本達：飛び石参与観察から論じる前衛的な批評と実践—異カースト間結婚がダリト運動の戦略とならない理由を問う

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計11件（うち査読付論文 7件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 8件）

1. 著者名 鈴木晋介	4. 巻 vol.8 No.1
2. 論文標題 ラフィングブダ スリランカにおけるグローバルな民間信仰の生成	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 茨城キリスト教大学学術研究センター『研究シリーズ』	6. 最初と最後の頁 1-28
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 志賀浄邦	4. 巻 38
2. 論文標題 プラグマティズム という視座から見たインド仏教	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 『京都産業大学世界問題研究所紀要』	6. 最初と最後の頁 37-30
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 根本 達	4. 巻 86/3
2. 論文標題 虚空を造形する佐々井秀嶺の宗教表現の分析：岩田慶治の新アニミズム、C.S.パースの記号論、佐藤信夫のレトリック論を視座として	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 文化人類学	6. 最初と最後の頁 384～403
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.14890/jjcanth.86.3_384	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 関根康正	4. 巻 21
2. 論文標題 アンバードカルの仏教改宗運動についての一私見：それは、「改宗」という名の下での「宗教」脱出による自立「思想」への革命実践であった	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 龍族	6. 最初と最後の頁 2～3
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 根本達	4. 巻 22
2. 論文標題 佐々井秀嶺保存史料のデジタルアーカイブ化プロジェクト：5年間（2016年11月から2021年12月まで）の取り組みについて	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 龍族	6. 最初と最後の頁 4～5
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 関根康正	4. 巻 84/4
2. 論文標題 「例外状態」論から再考するストリート人類学：ネオリベラリズムに抗する〈往路と復路〉の人類学	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 文化人類学	6. 最初と最後の頁 387～412
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.14890/jjcanth.84.4_387	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 志賀浄邦	4. 巻 36
2. 論文標題 B. R. アンベードカルの改宗論：「知的亡命」としての仏教への改宗	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 京都産業大学世界問題研究所紀要	6. 最初と最後の頁 71～109
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Sekine, Yasumasa	4. 巻 21/1
2. 論文標題 Reconsidering Street Anthropology from the Theories of “The State of Exception” : Anthropology associated with “Duplexed Gazes” for Resisting Neoliberalism	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Japanese Review of Cultural Anthropology	6. 最初と最後の頁 7～78
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.14890/jrca.21.1_007	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Shiga, Kiyokuni	4. 巻 78
2. 論文標題 Jaina Doctrines transmitted by Tibetan Buddhists	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Memoirs of the Research Department of the Toyo Bunko	6. 最初と最後の頁 85 ~ 114
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 志賀浄邦 (Kiyokuni SHIGA)	4. 巻 29
2. 論文標題 The Relationship between the Jainas and the Buddhist treatise Tattvasamgraha(-panjika)	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 ジャイナ教研究 (Journal of Jaina Studies)	6. 最初と最後の頁 13 ~ 56
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 志賀浄邦	4. 巻 39
2. 論文標題 人は快・不快をどのように知覚するのか？ 仏教思想から見たWell-beingと幸福	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 京都産業大学世界問題研究所紀要	6. 最初と最後の頁 81 ~ 93
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件 (うち招待講演 1件 / うち国際学会 1件)

1. 発表者名 志賀浄邦 (Kiyokuni SHIGA)
2. 発表標題 On the relationship between the validity of two kinds of pramana and the Buddha ' s teachings
3. 学会等名 第6回国際ダルマキールティ学会 (6th International Dharmakirti Conference) (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 根本達
2. 発表標題 「歪み」を生む異カースト間結婚：アンベードカルの『カーストの絶滅』から見るポスト・アンベードカルの不可触民解放運動
3. 学会等名 日本南アジア学会第33回全国大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 関根康正
2. 発表標題 写真観察法から見たKJ法
3. 学会等名 日本創造学会（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 志賀浄邦
2. 発表標題 人は快・不快をどのように知覚するのか？ 仏教思想から見たWell-beingと幸福
3. 学会等名 日中研究交流：国際ワークショップ「科学技術進歩と人間社会」
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計5件

1. 著者名 松本博之、関根康正、長谷千代子、西垣有、池口明子、岡本耕平、野中健一	4. 発行年 2022年
2. 出版社 京都大学学術出版会	5. 総ページ数 362
3. 書名 岩田慶治を読む 今こそ 自分学 への道を	

1. 著者名 Toshie Awaya, Kazuo Tomozawa, Kentaro Kuwatsuka, Eric Denis, Tatsuya Kusakabe, Junko Kiso, Shuji Uchikawa, Binod Khadria, Satish Deshpande, Kazuyo Minamide, Tatsushi Nemoto, Ai Sugie, Seika Sato, Sae Nakamura, Nivedita Menon	4. 発行年 2023年
2. 出版社 Routledge	5. 総ページ数 341
3. 書名 Inclusive Development in South Asia	

1. 著者名 泉水英計、永野善子、松本和也、松岡昌和、高城玲、山本博史、福浦一男、関根康正、村井寛志、鶴園裕基、八尾祥平、知花愛実	4. 発行年 2022年
2. 出版社 御茶の水書房	5. 総ページ数 380
3. 書名 近代国家と植民地性：アジア太平洋地域の歴史的展開	

1. 著者名 志賀浄邦	4. 発行年 2022年
2. 出版社 起心書房	5. 総ページ数 582
3. 書名 シャーンタラクシタ『真実集成』の原典研究 業報・論理・時間	

1. 著者名 清水展、飯嶋秀治、青木恵理子、伊藤泰信、赤嶺淳、山本紀夫、関根康正、香月洋一郎、清水昭俊	4. 発行年 2020年
2. 出版社 京都大学学術出版会	5. 総ページ数 454
3. 書名 自前の思想：時代と社会に応答するフィールドワーク	

〔産業財産権〕

〔その他〕

佐々井秀嶺デジタルアーカイブ
<https://sasaiarchives.com/>

B.R. アンバードカルおよびエンゲイジドブuddhイズム研究会（2020年11月13日、2021年3月17日、2022年2月17日、2022年8月20日、2023年3月20日、2024年3月20日～21日）、研究報告（根本達、鈴木晋介、関根康正、志賀浄邦）

B. R. アンバードカル及びエンゲイジド・ブuddhイズム研究会Facebook
<https://www.facebook.com/ambedkarengagedbuddhism>

佐々井秀嶺講話・対話会「若者たちへ 佐々井秀嶺との対話」（2023年6月24日、佛敎大学成徳常照館常照ホール）、研究成果報告（根本達、鈴木晋介）

佛敎大学研究活動報manako
<https://bukkyo-u-research.jp/research/research31/>

京都産業大学世界問題研究所HP「研究会開催内容」
<https://www.kyoto-su.ac.jp/research/sekaimondai/kenkyu.html>

【世界問題研究所】上海社会科学院と本学で国際ワークショップを開催しました！
https://www.kyoto-su.ac.jp/news/20230901_ws_850_kenkyu.html

【文化学部】志賀浄邦教授が著書『シャーンタラクシタ『真実集成』の原典研究－業報・論理・時間－』を出版
https://www.kyoto-su.ac.jp/news/2022_fcsi/20220407_190_prof_shiga_publishing.html

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	鈴木 晋介 (Suzuki Shinsuke) (30573175)	茨城キリスト敎大学・文学部・教授 (32101)	
研究分担者	関根 康正 (Sekine Yasumasa) (40108197)	京都精華大学・その他の部局・研究員 (34317)	
研究分担者	志賀 浄邦 (Shiga Kiyokuni) (60440872)	京都産業大学・文化学部・教授 (34304)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関